

令和 元年 6 月 24 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04471

研究課題名(和文) インクルーシブ教育における学習集団の質的发展を目指した指導法とカリキュラムの開発

研究課題名(英文) Development of Teaching Methods and Curriculum aiming at Qualitative Development of the Learning Group in Inclusive Education

研究代表者

吉田 茂孝 (YOSHIDA, shigetaka)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60462074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はインクルーシブ教育における学習集団の質的发展の指導法とカリキュラムの開発を究明するために、日本とドイツの取り組みから検討した。その結果、学習集団の質的发展に必要な視点を明らかにするとともに、学習集団の発展モデルや指標を作成した。また、ドイツにおけるインクルーシブ教育のカリキュラムの構想も明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インクルーシブ教育の時代においては、多様なニーズのある子どもを含む学習集団を高める指導法とカリキュラムの開発は喫緊の課題である。そこで、日本とドイツを中心に文献研究及び小学校などで授業研究やフィールドワークを行った。その結果、実践現場にとって必要な学習集団を高める指導法とカリキュラムの視点を明らかにするとともに、そのモデルも作成した。

研究成果の概要(英文)：This research examined from the educational approach of Japan and Germany in order to investigate the development of the teaching methods, and curriculum of the qualitative development of the learning group in inclusive education. As a result, while clarifying the viewpoints required for the qualitative development of the learning group, I created the development model and an index of the learning group. I also clarified the concept of the inclusive educational curriculum in Germany.

研究分野：社会科学

キーワード：教育方法学 インクルーシブ教育 学習集団 ドイツ 指導法 カリキュラム 発展モデル 学習規律

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

特別支援教育が注目されることで通常学級における「特別な教育的ニーズ」のある子どもを含む「すべての子ども」に通用するという「ユニバーサルデザインの授業」が、現在推進されるようになった。それは、「答えを出す」という目的に向かって授業をシンプルにする「焦点化」、板書を見たり、ヒントとなる身振りや手振りを見たりして考える「視覚化」、答えの導き方など言葉への着目の仕方を共有する「共有化」の3つのポイントが主張されている。けれども、ユニバーサルデザインの授業の目的が、「答えにたどり着くための方法を教える」ということに矮小化される危険性が指摘されている(新井英靖「発達障害児などの学習困難児に対する教科指導の方法論」日本教育方法学会編『教育方法42 教師の専門的力量と教育実践の課題』図書文化社、2013年)。つまり、授業研究の歴史において大切にされてきた授業中の「つまずき」や「誤答」よりも、「答えにたどり着く」ためのシンプルな方法に価値が置かれてしまう学習集団へと変容してしまうのである。また、ドイツではPISA調査の結果、PISA型のスタンダード化された授業づくりが展開している。スタンダード化した授業スタイルがもたらす問題として、この授業に適応できない子どもたちは、排除されることが指摘されている。こうした学力の問題をはじめ移民の問題、インクルーシブ教育から「異質性」「多様性」といったキーワードが注目されている(久田敏彦監修・ドイツ教授学研究会編『PISA後の教育をどうとらえるか - ドイツをとおしてみる -』八千代出版、2013年)。

このように、「答えにたどり着くための方法」やスタンダード化された授業づくりでは、「つまずき」や「誤答」をする子ども、スタンダード化された授業になじめない子どもは、排除されてしまう問題がある。そこで、子どもたち一人ひとりに見られる「異質性」や「多様性」などを生かした学習集団での学び合いの指導法を構想し、また学習集団での学び合う関係についても年間レベルなど長期間を見越した指導の計画を作成する。そうすることで、今日求められるインクルーシブ教育を推進する授業実践の解明につながるのではないだろうか。

これまで、研究代表者は2008~2009年度及び2013~2014年度までの科研費の研究において、香川県や福岡県において一定期間同じ学校でフィールドワークを行うことにより、日々の学級指導と授業指導の相互作用が子ども同士の「つながり」をつくり出すこと、授業において周りの子どもたちと「つながる」ための学習集団のあり方を文献研究と交差させながら明らかにしてきた(若手研究(B)課題番号20730524、課題番号25780478)。

しかしながら、「特別な教育的ニーズ」のある子どもは、授業において周りの子どもと学び合うことができず、「特別」扱いされたりしている。そうした子どもが周りの子どもたちと学び合うための学習集団への指導法や、授業の中で学び合いをつくり出すカリキュラムの開発、さらには、個別の形態を含めた「自己の学びのカリキュラム」を開発することは課題である(湯浅恭正編著『特別支援教育を変える授業づくり・学級づくり全3巻』明治図書、2009年、インクルーシブ授業研究会編『インクルーシブ授業をつくる - すべての子どもが豊かに学ぶ授業の方法 -』ミネルヴァ書房、2015年)。こうした課題に対して、日本では学習集団づくりの教育実践が各地で展開されてきた(吉本均著『学級の教育力を生かす吉本均著作選集全5巻』明治図書、2006年)。今日では、学びの共同体などの「学び合い」が展開している(佐藤学著『学校を改革する - 学びの共同体の構想と実践』岩波書店、2012年)。また、ドイツでも、個別支援ではなく、多様な子どもが存在する学級で学ぶ、共同授業が注目されている(吉田茂孝「ドイツにおけるインクルーシブ教授学の展開」大阪教育大学大学院学校教育専攻教育学コース編『教育学研究論集』第12巻、2015年)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、インクルーシブ教育への注目により障害のある子どもだけではなく、「特別な教育的ニーズ」のある子どもを含む通常学級で編成される学習集団を、日本の授業研究の動向に加え、ドイツを中心に検討し、年間を通じて高めていく学習集団の具体的な指導法とカリキュラムを開発することである。具体的には、ドイツ教授学をはじめ個別化と集団化に関する教授学やカリキュラム論を基本的な理論とし、日本の小学校において特別な教育的ニーズのある子どもを含む学習集団を高める学級づくり・授業づくりの分析から、指導法とカリキュラムについて検討し、学習集団の質的発展について年間を通じての指導の見通しをもった指導法(計画)を開発することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、目的を達成するために以下の3つの方法を実施した。

(1) 日本における学習集団論を中心とした文献研究(国内文献研究)

日本においてインクルーシブ教育について言及している授業論、特に、学習集団論を中心とした文献を収集し、学級レベルでの指導法だけではなく、学校レベルでの教師同士の共同のあり方にも注目して検討した。

(2) 学習集団の質的発展の指導法とカリキュラムに関する研究(日本の小学校の授業分析)

授業改善に取り組んでいる大阪府、香川県、高知県、広島県、熊本県、長崎県の小学校において授業研究を行うとともに、授業研究会やサークルにも参加し、資料収集やフィールドワークも行った。

(3) ドイツのインクルーシブ教育の実際と課題に関する研究(ドイツ調査研究)

文献研究とともに、ドイツのブレーメン市の基礎学校などでの授業参観やインタビュー、教育省関係者やブレーメン大学の教員とも意見交換を行った。

4. 研究成果

本研究では、先行研究の整理やフィールドワーク・調査などから学習集団の質的发展の構造に求められる視点とそのモデルや指標及びドイツのカリキュラムの構想について以下の点を明らかにした。

(1) 学習集団の質的发展の構造に求められる視点

インクルーシブ教育は、障害の「ある」「なし」を前提にするのではなく、また通常学級を単なる場の統合に終始させることでもない。あらゆる子どもたちの差異や多様性を認めながら、あらゆる子どもを「包み込む」という考え方である。それは、「みんな同じ」として学級全体を同化し、特別なニーズのある子を排除することではない。そうではなくて、一人ひとりが大切にされ、差異を生かしつつ共同の世界に「開かれていく」学びの場と学びに値する集団を当事者の目線からつくり上げる必要がある。それゆえ学習集団の質的发展においても、特別なニーズのある子どもと共に学級の子どもにも、障害特性をふまえた特別な指導などを受け止めたり、折り合いをつけたりする力やその指導を超えていく力、さらには学習の場での差異と共同の関係を育てることが目指される。この点でインクルーシブ教育から見た学習集団の質的发展の構造には以下の5つの視点が求められる。

差異と共同の関係をつくり出す学習集団

インクルーシブ教育において多様な差異のある子どもが生かされ、共同して学びを深める世界を実現する学習集団が求められる。こうした学習集団は、教師の定めた正答とその正答へのプロセスに予定調和的に向かって学ぶ集団ではない。このような学びは「正答主義」に陥り、教師の定めた正答を導く子ども以外は排除されるか、その正答へのプロセスに同化してしまう。むしろ大切なのは、差異と共同の関係を授業づくりにおいて実践することで、授業において差異を承認し合い、共同して学びを深める関係がつくり出されることが必要である。

子どもの関係性を変化させる学習集団

差異と共同の関係をつくる際、その共同の質に注意したい。アクティブ・ラーニングなど近年推奨されている授業において共同が志向されているが、特別なニーズのある子どもは、「教える - 教えられる」という関係において、教えられる側に固定化している場合がある。例えば、「教える側」の子どもにとって、「教えられる側」の子どもの「わからなさ」に向き合うことで、「教える側」の子どもは何度も教え、多様な教え方 = 考え方を得ることができるが、「教えられる側」の子どもはわからないままの状況で、その「わからなさ」を表明できないまま困っていると考えられる。こうしたインクルーシブ教育における共同とは、共同によって「わからなさ」のある特別なニーズのある子どもに学びが生まれるだけではなく、その子どもの学びによって他の子どもにも学びが生じる必要がある。それは、特別なニーズのある子どもが授業に参加し、学びが生じた状況とともに、その学びから、他の子どもたちが感化されたり影響を受けたりして、他の子どもにも学びが生まれる状況である。このように子どもたちの関係性を変化させることで、授業における差異と共同の関係が高められていくのである。

インクルーシブ教育におけるカリキュラムと学習集団の関係

インクルーシブ教育において差異と共同の関係を保障する場合、カリキュラムとの関係も重要である。特別なニーズのある子どもの学びのためには、求められる学習内容や学習目標を問い直したカリキュラムの開発が求められる。その際、インクルーシブ教育のカリキュラムのあり方として、2つの方向性があげられる。一つは、同じ学習内容での共同のあり方である。同じ学習内容という枠の中で、特別なニーズのある子どもを含む子どもたち一人ひとりの差異を引き出しながら、共同を志向する考え方である。この点は授業において差異を承認し合い、共同して学びを深める差異と共同の世界に通底する。もう一つは、通常学級の枠の中で子どもにカリキュラムを選択させることである。子どもにカリキュラムの選択権があることで、子どもが納得して取り組めるカリキュラムを構想することも重要である。この場合、学びは個別化していくため、学習集団とその子ども自身につながりがあることやその子どもが排除されていないという意識の形成が求められる。インクルーシブ教育において求められるカリキュラムは、差異のある学びとともに子どもたち同士のつながりを学習集団においてつくり上げることである。こうした視点は、ドイツのインクルーシブ教育においても単なる個別化ではなく、共通・共同の学びが実践されていた。

特別ルールをつくり出す学習集団

特別なニーズのある子どもは授業において、その障害の特性などから学級の「ルール」を守れなかったりする。この点で「特別ルール」が必要になる。けれども、「特別ルール」が周りの子どもたちから「特別扱い」と見なされ、特別なニーズのある子どもを排除する問題などがあげられる。本研究では、この「特別ルール」についても注意する点が明確になった。

多様な学習支援の場の保障

インクルーシブ教育では、多様な職種が協働して子どもたちに多様な学習支援の場を保障することが求められている。それは、学級担任の教師だけではなく、特別支援学級の教師、養護教諭、支援員、時として、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの参加も必要である。すなわち、学級担任の抱えている困難は個々の学級のみで対応するのではなく、学校全体の課題であるという認識が重要である。学級担任の困難を学校全体の課題としてとらえない限り、インクルーシブな学校は成立しない。というのも、子どもたちにとって多様な学習支援の場の保障や居場所を創造することが必要だからである。例えば、特別なニーズのある子どもを通常学級に適應させるのではなく、その特別なニーズのある子どもの居場所をめぐって、特別支援学級の教師や保健室の養護教諭の役割をはじめ、通常学級の担任との共同のあり方も明らかになった。

(2)インクルーシブ教育における学習集団づくりの発展モデル(試案)と指標(試案)

(1)の5つの視点をふまえ、「インクルーシブ教育における学習集団づくりの発展モデル(試案)」と「インクルーシブ教育における学習集団づくりの指標 - 学習規律 - (試案)」を仮説的に作成した。

前者の発展モデル(試案)は、これまでの先行研究を手がかりに、「インクルーシブ教育における学習集団のイメージ」として、次の第～の発達段階を設定した。第段階「存在の承認と多様な参加を保障する学習集団」、第段階「差異を認め合う学習集団」、第段階「学習要求を出し合い共有できる学習集団」、第段階「差異と共同の関係をつくる学習集団」、第段階「学校的価値を相対化し、授業をつくり変えていく学習集団」である。なお、それぞれの段階に「特別なニーズのある子どもと集団への指導のポイント」についても整理した。

後者の指標(試案)は、学習規律に着目して作成した。内容としては、「学習規律に関する項目」として、「きまり・ルールと規律の基礎理解」「きまり・ルールのつくり方」「学習規律の形成」「学習規律が向かう先」「特別なニーズのある子どもに対する『特別ルール』」を設定し、それぞれの項目に対して、具体的な「指導の指標」を整理した。

(3)ドイツにおけるインクルーシブ教育のカリキュラムの構想

ドイツのインクルーシブ教育では、授業の構想として、参加、権利を保障するプロセスを準備するだけでなく、それを実現できるカリキュラムをはじめ学校制度の構想が整えられてきていることが明らかとなった。

そのなかで、カリキュラムを必修部分と選択部分とに分けることや、テーマベースにした諸教科横断的なカリキュラムを構想することが模索されていた。こうしたカリキュラム・授業の実現を考える場合、特別なニーズのある子どもには、それに応じた特別な支援も必要である。プレーメン市の調査からは、通常学級で共に学ぶためには組織的(支援教育センター(ZuP)、地区の教育相談・支援センター(ReBUZ))、制度的(修了の保障体制)、環境構成的な支援(別室や学年の関係者が集まる職員室)が普及していることがうかがえた。

なお、本研究の成果として『インクルーシブにおける学習集団の質的発展を目指した指導法とカリキュラムの開発』(2016～2018年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書、研究代表者 吉田茂孝、2019年3月)を刊行した。本研究成果の内容は、同報告書に依拠するものである。

<参考文献>

- ・深澤広明・吉田成章編『学習集団研究の現在 Vol.1 いま求められる授業づくりの転換』溪水社、2016年。
- ・深澤広明・吉田成章編『学習集団研究の現在 Vol.2 学習集団づくりが描く「学びの地図」』溪水社、2018年。
- ・湯浅恭正・新井英靖編著『インクルーシブ授業の国際比較研究』福村出版、2018年。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

吉田茂孝・樋口裕介「ドイツにおけるインクルーシブ教育のカリキュラムの検討」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第63巻、2018年、169-179頁、査読無。

吉田茂孝「インクルーシブ教育における総合的な学習の時間の検討—ドイツの事実教授を手がかりに—」大阪教育大学大学院学校教育専攻教育学コース編『教育学研究論集』第14巻、2017年、21-27頁、査読無。

[学会発表](計6件)

吉田茂孝「インクルーシブ教育における学習集団の質的発展の構造」中国四国教育学会第70回大会、2018年11月17日、島根大学(島根県・松江市)。

吉田茂孝「ラウンドテーブル：特別支援教育分野におけるエビデンスをめぐる議論」中国四国教育学会第 69 回大会、2017 年 11 月 26 日、広島女学院大学（広島県・広島市）
吉田茂孝・樋口裕介「ドイツにおけるインクルーシブ教育のカリキュラムの検討」中国四国教育学会第 69 回大会、2017 年 11 月 25 日、広島女学院大学（広島県・広島市）
樋口裕介「陶冶履歴研究（Bildungsgangforschung）にもとづく学習者の参加に関する一考察」中国四国教育学会第 68 回大会、2016 年 11 月 6 日、鳴門教育大学（徳島県・鳴門市）
吉田茂孝「インクルーシブ教育における総合的学習の検討—ドイツの事実教授を手がかりに—」中国四国教育学会第 68 回大会、2016 年 11 月 6 日、鳴門教育大学（徳島県・鳴門市）
吉田茂孝「現代ドイツの授業におけるグループの検討—グループ授業から協同学習への発展動向に着目して—」日本教育方法学会第 52 回大会、2016 年 10 月 1 日、九州大学（福岡県・福岡市）

〔図書〕（計 7 件）

吉田茂孝「ドイツのインクルーシブ教育」「インクルーシブ授業の指導技術」「多様な学習方法・学習支援の場の保障」「学習集団の質的発展」湯浅恭正・新井英靖・吉田茂孝編著『よくわかるインクルーシブ教育』ミネルヴァ書房、2019 年、232 頁（22-23 頁、146-147 頁、148-149 頁、150-151 頁）
吉田茂孝「教育改革と特別支援教育」湯浅恭正編『よくわかる特別支援教育 [第 2 版]』ミネルヴァ書房、2018 年、232 頁（10-11 頁）
樋口裕介・吉田茂孝「インクルーシブ学校の実現に向けた政策動向 - ニーダーザクセン州を手がかりに -」湯浅恭正・新井英靖編著『インクルーシブ授業の国際比較研究』福村出版、2018 年、408 頁（303-309 頁）
北川剛司・樋口裕介「学習集団研究からみた「カリキュラム・マネジメント」の課題」深澤広明・吉田成章編『学習集団研究の現在 Vol.2 学習集団づくりが描く「学びの地図」』溪水社、2018 年、161 頁（22-38 頁）
吉田茂孝「インクルーシブ教育を重視した校内授業研究と学校づくり」深澤広明・吉田成章編『学習集団研究の現在 Vol.2 学習集団づくりが描く「学びの地図」』溪水社、2018 年、161 頁（39-52 頁）
吉田茂孝「ケース検討を通して指導のあり方を問う」「指導力向上のための指導案づくり」「授業の事実」から教師が学び合う授業研究へ」「エピソードを通して教師の専門性を高める」「障害児の教授学研究会編集、新井英靖・小川英彦・櫻井貴大・高橋浩平・廣瀬信雄・湯浅恭正・吉田茂孝編著『エピソードから読み解く特別支援教育の実践 - 子ども理解と授業づくりのエッセンス』福村出版、2017 年、208 頁（179-180 頁、186-187 頁、194-195 頁、197-203 頁）
吉田茂孝「学習のユニバーサルデザイン」日本学校教育学会編著『これからの学校教育を担う教師を目指す—思考力・実践力アップのための基本的な考え方とキーワード—』学事出版、2016 年、205 頁（108-109 頁）

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：樋口 裕介

ローマ字氏名：(HIGUCHI, yusuke)

所属研究機関名：福岡教育大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：80587650

(2)研究協力者

研究協力者氏名：田中 崇教

ローマ字氏名：(TANAKA, takanori)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。